



阿南町少年自然の家／平成24年4月撮影

(画面中央は国道151号線、左は旧道で早稲田神社から国道に連結する。上方は、田上、阿南消防署～富草地区～下條村～飯田市天竜峡ICへ20分程度)

# 巡回診療物語

～県立阿南病院の実践：阿南町和合地域と医療のかかわり～



地域の明日を医療で支える  
地方独立行政法人  
長野県立病院機構

— 和(なごみ)の医療センター —

**長野県立阿南病院**

〒399-1501 下伊那郡阿南町北條2009-1  
TEL.0260-22-2121 FAX.0260-31-1014

## 目 次

巻頭言（巡回診療で地域を支える実践）第5代院長 田中雅人……………	2
巡回診療の歴史（当院発行「50周年記念誌」の記事から抜粋）……………	3
巡回診療の様子（医師、看護師の手記・証言）……………	5
その1「阿南病院へき地巡回診療について」第4代院長 温田信夫……………	5
経過……………	5
診療の様子……………	5
研修の場……………	6
苦勞すること、楽しみなこと。……………	6
その2「巡回診療のひとこま」元総看護婦長 平栗寿美……………	7
〈余談1〉……………	7
〈余談2〉……………	8
〈余談3〉……………	8
その3「看護師さんの巡回診療従事記」……………	8
阿南地区の歴史（和合地区を中心として）事務部長 櫻井勝司……………	11
あとがき 事務部長 櫻井 勝司……………	19



## 巻頭言

### 巡回診療で地域を支える実践

第5代院長 田中 雅人



このたび小冊子を発行するに際して阿南病院が担ってきました「へき地巡回診療の歴史と現状」を報告書という形でまとめてみました。

さて全国自治体病院協議会（当時 社団法人）が平成14年11月13日に制定しました「自治体病院の倫理綱領」の使命、行動指針の第一に次のように記述されています。ご紹介しますと、その前段では、「地域住民によってつくられた自治体病院は、その地域に不足している医療に積極的に取り組む（以下省略）」とあり、また後段では、「1 地域医療の確保 自治体病院は、都市部から離島等へき地にいたるあらゆる地域において、住民のニーズに対応した適正な医療を提供する。」とあります。本冊子中に本院の歴史の一部をご紹介してあります。本院は、昭和23年6月より県立に移管され、早くも昭和36年には木曾谷を含めて巡回診療を行っています。その後木曾管内は木曾病院が、伊那方面は上伊那地域の医療機関が、下伊那南部地域にも各町村に国保診療所ができてきて本院の範囲が限定されたことは喜ばしいことだと思えます。しかしながら現在は、医師不足と医師の高齢化があって、たびたび診療所医師不在などがあると診療所への代診、巡回診療をしています。加えて入院施設は本院のみでありますので常に予断は許せません。このような形で地域医療を支えていく所存ですが、これも自治体病院としての使命であります。もうひとつ言わせていただくと、大学の医学部では、専門医教育が主流であります。へき地医療に必要なのは専門医よりも、むしろ「総合医（としての専門医）」であるかと思えます。本誌が地域医療を目指す研修医が本院の行っている巡回、訪問医療の重要性や保健、医療、介護との連携を学んでいただき、一人でも多くの総合医を輩出する一助となれば幸いです。「歴史は繰り返す」との格言もあります。昨年のも東日本大震災において、本院も医療救護班を派遣しましたが、「巡回診療チーム」がそのまま班編成できお役に立てたことが記憶に新しいところです。医療で地域を支える実践こそ、自治体病院を運営する私達の使命であると考えています。

結びになりますが、ご一読をいただきご意見をいただければ幸いです。

## 巡回診療の歴史 (当院発行「50周年記念誌」の記事から抜粋)

### ■当時副院長・現非常勤医師 熊谷 睦 (現職時代に外来診療、巡回診療を担当)

巡回診療の目的は、無医地区に住んでいる人達に医療を均等に与え、地域住民の福祉を向上させることにあります。無医地区とは、当該地区の中心場所を拠点としておおむね半径4kmの地域内に、人口50人以上300人未満を有し、かつその中心場所から最寄の医療機関まで通常の徒歩で概ね1時間以上を要する地域となっております。従って、巡回診療は、へき地の住民の動態や医療機関の分布と姿勢によって実施状況が変化し、今日に至っています。

阿南病院では、昭和36年8月より実施、当初は、木曾郡開田村(菅沢、柳又地区)、新開村(上条、熊沢、幸沢地区)、日義村(新地、渡沢、神谷地区)、楢川村(桑崎地区)、上伊那郡箕輪町(長岡、新田地区)、飯田市(大平、松川入地区)を3泊4日(木～日曜日)の行程でジープを使用し、医師、看護婦、運転手兼事務の編成であった。

当時は疾患も多様で、高血圧、消化器疾患、感冒、リウマチ、神経痛、皮膚炎、伝染性疾患等が多く見られた。昭和38年9月木曾病院発足により、同年後半から木曾郡を木曾病院にお願いし、上伊那郡箕輪町(長岡、新田地区)と飯田市(大平、松川入地区)のみとなった。昭和39年～42年にかけて箕輪町(長岡、新田地区)に代わって、新たに下伊那郡阿南町(日吉、鈴ヶ沢、宮沢)と下條村(明智原開拓地)の実施が必要になり、この間に飯田市(大平、松川入地区)は集団移住となったので中止となった。

また昭和40年から42年に至り、富草診療所医師が突如転出という事態から巡回が必要になり、応急的に下條村明智原と併せて実施した。更に昭和43年富草診療所に外人医師が従事することとなり同地区を廃止して、昭和45年よりは、阿南町(日吉、鈴ヶ沢、宮沢地区)のみを月2回実施しています。理想的な巡回診



副院長 熊谷 睦 (当時)巡回診療記事

※ 18 ページ地図参照

療は、週1～2回と考えられますが、それには十分な医療スタッフの確保という問題があります。へき地に住民が居住する限り巡回診療の必要があると思います。

(長野県無医地区巡回診療実施要綱、同実施細目、巡回診療車行動表、診療日程表(昭和36年当時)は、割愛します。)



巡回診療を待つ患者様

#### 病名概況(昭和36年当時)

高血圧、神経痛、胃炎、感冒、皮膚病、動脈硬化症、耳下、蛔虫、眼科、貧血、膣内炎、扁桃腺、打撲傷、更年期障害、脱腸、歯水膿漏、鼻科

#### ■温田信夫 前院長・老健所長(故人・平成24年5月1日永眠 享年63歳)

平成8年度以降熊谷睦医師に代わり担当。和合地区(日吉、鈴ヶ沢、宮沢)コースは、まず日吉に行き、鈴ヶ沢、峠越えて浪合に出て宮沢に下った。冬期は、鈴ヶ沢から戻り押ノ田まわりで宮沢に入る。平成9年度より日吉・鈴ヶ沢と宮沢の2コースに分けた。移動薬局なので、予め調剤と臨時薬を持参、血液検査は病院持帰後、超音波も携帯型が購入できれば・・・(略)。地域の要請に応じていきたい。

#### ■三浦小太郎(元運転手兼事務)

(前略)昭和61年上村診療所医師不在の間(5月～10月)、毎週木曜日(上村、程野地区)、(上村、下栗地区)を巡回診療実施、昭和63年天龍村診療所医師不在の間(12月～1月)、毎週月、火、金曜日に巡回診療を実施。

## 巡回診療の様子 (医師、看護師の手記・証言)

### その1 「阿南病院へき地巡回診療について」

第4代院長 温田 信夫



#### ■経過

昭和36年8月から、県の政策により無医地区解消のために阿南病院と須坂病院においてへき地巡回診療班をおいて開始された。

阿南病院では、上伊那郡箕輪村から塩尻を経て、木曾郡開田村、新開村、日義村、楯川村の各無医地区と飯田市松川入り、大平地区を3泊4日かけてジープで巡回診療した。医師、看護師、運転兼事務員が当たった。

昭和38年木曾病院発足、ほどなく木曾郡担当はなくなった。昭和39年～42年にかけて阿南町三地区と下條村一地区のみとなり、昭和45年からは阿南町日吉、鈴ヶ沢、宮沢地区のみとなった。この時から薬剤師が加わるようになった。昭和61年上村、昭和63年天龍村診療所医師不在時に巡回診療を行っている。

#### ■診療の様子

現在診療を行っている阿南町日吉、鈴ヶ沢地区は標高700～900mと高く、冬は寒いため、当番の人がストーブをつけたり、炬燵の用意をしてくれている。対象者は3～10人で全員が高血圧症や整形外科疾患をもち、糖尿病の方もいる。

以前は現地で粉薬まで調合していたため重い器材を運ぶのに苦勞したり、時間を要したりと大変なので、定期薬は病院で作って持っていくようにした。風邪薬などは鞆1個に各種揃えて持参している。

また診療の質を確保するために血液検査も定期的に行い、携帯型エコーにより腹部超音波検査も行っている。診療していて気付くことは、春から夏にかけては農作業もあり気候次第も良いので、体重と血圧が低めとなるが、冬は寒さも厳しく身体も動かさないため、体重血圧ともに高めとなり、薬の調節を必要とする患者さんもいることである。

※ 18 ページ地図参照

## ■研修の場

平成16年度以降の新医師臨床研修の場として巡回診療を体験してもらっている。自治医大卒業医師と飯田市立病院研修医（信大卒が多い）が参加。

飯田女子短大看護科コースの学生も数年間参加していた。

## ■苦勞すること、楽しみなこと。

診療所への道路は、現在80歳代の患者さん達が戦後の若い頃に開設したもので、舗装されたとはいえ、すれ違いのできないような狭い箇所が殆んどで大雨の後には必ずと言ってよいほど崩落により不通となる。通常なら40～50分のところを今も二つの峠を越え遠回りして行っている。以前には雪に突っ込んでしまい脱出に大変苦勞したこともある。

病院の場を離れて、天気が良ければ花や紅葉を眺めることもできるため、楽しみにしている職員もいる。診療後のお茶会で患者さん達の地元の話聞くのも楽しみになっている。

（平成24年4月24日記）

※ 温田信夫 前院長・老健所長は、本誌編纂中の平成24年5月1日他界され、ご遺族による葬儀が執り行われました。この原稿が事実上先生の遺稿となりました。ここに謹んで合掌をいたします。



和合地区 日吉巡回診療所の外観、室内  
（平成24年4月25日撮影）

## その2 「巡回診療のひとこま」

(元総看護婦長 平栗寿美 (阿南准看護学院2期生) より聞き取り)

昭和36年に3泊4日の木曾谷への巡回診療を始めた。それは木曾谷に医療機関が少ないため補う役を担った。上伊那(長岡新田)から塩尻に抜け(泊)その後に木曾地域(楢川村・木祖村・日義村・木曾福島町・上松町)で診療(「かけ橋温泉」泊)。同地域(大桑村・開田村・三岳村・王滝村・南木曾町)で診療(「三留野宿」泊)。大平峠を越え飯田市(大平・松川入)地籍で診療して、阿南町に戻る行程であった。

当時のこの旅費が看護師は1回8,000円と割高であり若者にはとても魅力であった。参加者は当初、医師・看護師・運転手の3名でありその後になって薬剤師が同行するようになったが、それまでは看護師が調剤を行っていた。また悪路(未舗装道路)のためジープで移動したが埃まみれになり、冬期は深い雪に難渋するなど運転手も大変であった。この巡回診療は、毎週1回 月4回(3泊4日)、患者様は1か所で10~15名程であった。



### 《余談1》

初代荒木院長は、阿南病院には、「甲・乙種看護婦制」から「新制・看護師」になったが看護師が8名しかおらず、早晚看護師不足になるからと准看護学院を創設した。その際に「看護教育も専門教育だけでは、ひとりの人間形成にはならない」と近くの阿南高校で一般教養を受けさせるという事を始めた。

当時この木曾谷の巡回診療に合わせたように愛知県磐田郡の国保・浦川診療所に看護師は一週間の派遣命令が出され、さらに飯田市千代(旧千代村)にも同じ形で出向いていた。初代院長は外科の医師であり、多数の外科医が千葉大学から阿南病院に来ており、充実した医師体制があったので機材を持ち込んで両診療所で手術も行い、一週間派遣していた看護師がひとりで術後の管理を任されていた。院長は、巡回診療における看護師の技量を認めていたと思われる。

### 《余談2》

昭和37年頃に県の看護協会主催の学会に「当院のへき地巡回診療」という演題で発表した際、「巡回診療」という言葉さえ知らない人達が多く驚かれた。

### 《余談3》

当時は肺結核の外科的治療が多く行われていたが、その後関節リウマチ治療も手掛けた。さらにリハビリテーションにも力を入れたが、これらは「現在のリハビリ」のはしりではないかと思われる。



初代院長 荒木武雄(S23.6.1～40.11.19)



木曾谷巡回診療(左端が平栗寿美)

## その3 「看護師さんの巡回診療従事記」(現役の証言)

- 木曾、上伊那に行かなくなってからも、3か所(日吉、宮澤、鈴ヶ沢)の巡回に弁当持参で出掛けた。昼食後の昼寝タイムが貴重であった。
- 阿南といえども雪深い時期が有り、雪かきをした事も、動かなくなった車を押し出した事もあった。
- 巡回診療に行ってもその場所に来られなくなった方の家まで巡回診療車で回り、診察し処方してきた事を思い出す。その家は山深く一軒家で有った事が忘れない。
- 集まる方々は一つの行事のようになっており、たくさんの漬物・山菜料理・手造りのお焼きなど本当に美味しかった。

### ■ブドウ糖1本してもらおうと元気になる老人の話

その注射を楽しみに来る方がおり、その為に当時はガラスのアンブルで体温程度に温める必要があり、到着し準備の段階で地元の当番さんという方の準備して下さっている湯を湯呑茶碗にいれ、その中にアンブルを入れて温める。(鬼太郎の目玉のおやじの入浴の様だ)。今では考えられない風景かもしれない。20%ブドウ糖 20ml にアリナミン F20ml の効果は絶大でした。

- 一番多い思い出話は「カメムシの掃除」でした。冬場はストーブを焚き部屋が暖まると、そこここから這い出して来るカメムシの大群がおり、掃除をしてから診療でした。

(⑩カメムシは別名「屁苦き虫」又は「ヘッピームシ」)

### ■「看護師の立場から見た巡回診療」(看護師・熊谷ぎんよ)

巡回診療の当番が年に数回まわってくる。昼食後、胃袋が重たくなってからの出発で、片道30分以上車にゆられて行く。車窓からのながめは？というところ、澄んだ川と手の届きそうな位置に続く高い山だけ、でもそれが、四季おりおりの変化をみせて美しく楽しみでもある。

診療場所では、診察を待つ人たちが談笑している。「こんにちは」と声をかけると「こんにちは、ご苦労様でございます」と穏やかな声が返ってくる。2週ごとにおとずれるこの日を待って、部屋の中は準備が整っている。

診察が始まると「先生、あれ欲しいよう、塗る薬」とか「赤い玉の薬も貰いたい」等々、時々、家族の話が出たりして和む。気をつけるように言われたりすると「そうだなあ、どうもだめだな」と頭を掻きながら笑顔で答える。

子や孫は遠くに住み、高齢者にとっては食の工夫も難しそうです。毎回持ってくる健康手帳には、今までの血圧や体重の値が書き込まれていて経過がよくわかるようになっている。診察の後にはお茶を用意してくれている。水がおいしいせいなのか、そのお茶がとてもおいしい。いただきながら最近ニュースで聞くことや、地域の出来事などが話題になる。皆があれや、これやと話すこの時間がとても貴重に思える。腰や膝が曲がり、杖を必要とするお年寄りの姿は、この険しい山の中で暮らし続けてきた年月の重みを感じさせるものでもあります。住み続けるには不便であろうと思うが、住み慣れた人たちは不便を感じつつも、この場所が一番と思って暮らしておられるのがよくわかる。住民が必要とするかぎりこの

診療が続き、一年でも長くこの人たちの援助ができたらと思う。次に会う時もみんなが揃っていて欲しいと思いつつ帰路につく。



和合地区 鈴ヶ沢巡回診療におけるスナップ（平成 24 年 1 月 24 日撮影）

### トピックス

「鈴ヶ沢なす」、「鈴ヶ沢うり」が「信州の伝統野菜伝承地栽培認定制度」により平成 20、21 年度に認定されました。現在は、和合活性化協議会が中心となり、「鈴ヶ沢南蛮」（唐辛子）を含む 3 品種は、鈴ヶ沢巡回診療所（集会所・元分校跡）下の実験農場で種の保存、普及活動に取り組まれています。つまり鈴ヶ沢の住民は「原種」を保存し、地域活性の支えとなっている方々なのです。



鈴ヶ沢なす



鈴ヶ沢うり



鈴ヶ沢南蛮（唐辛子）



※ 18 ページ地図参照

## 阿南地区の歴史 (和合地区を中心として)

事務部長 櫻井 勝司

平成 23 年 (2011 年) 3 月 11 日「東日本大震災」が発生した。が地震大国日本では大騒ぎすべきことではなさそうだ。科学技術の進歩と共に、予知が足りないとか危機管理が出来てないとかに議論が行くばかりだったような気がします。現実的には、大津波は東南アジアのみならずハワイ沖や南米チリまで及んだようです。原子力発電の依存度がここまで高いとは知らなかったのですが、放射能汚染があって、食物や植物への影響は、我々が思っていた以上に酷く、名著と言われた「沈黙の春」(1962 年に出版されたレイチェル・カーソンの著書。DDT を始めとする農薬などの化学物質の危険性を、鳥達が鳴かなくなった春という出来事を通し訴えた作品)の警告を思い起しますが、完全除染までには 30 年を要すとかで(「もっと掛かる」という説も)、放射線の内部被爆恐るべしです。地球は丸い。政治経済の世界も世界的規模で狭まり影響し合う時代になってきています。「地球は一つ」という事実が大切なのです。私は、阿南町「和合地区」を「グローバルとローカル」という視点から考察ご紹介してみたいと思います。

当院における巡回診療は、病院に残された記録によれば昭和 36 年に始まっています。現在は、下伊那郡阿南町和合地区の日吉(現公民館)と鈴ヶ沢(現集会所)の 2 か所の巡回診療所において延べ 254 人/年の患者様を対象にしております。それぞれ 1 回/2 週間の頻度で巡回診療をしているので、都合毎週 1 回は「無医地区(注)」にある巡回診療所に入って診療をしています。

①「無医地区」とは、半径 4km 以内に診療所が不在の地域をいい、市町村が当該地区を指定し、県立病院が巡回診療を行うシステムとなっている。(「長野県無医地区巡回診療実施要領」・「実施細目」)

②「和合巡回診療所への道」は、最終頁に添付してあります。

さて、最近謂われる「限界集落」という定義からすれば、あてはまるのが「和合地区」である。「和合地区」は、阿南町の面積 123.35 km<sup>2</sup>の約半分を擁し、平成 24 年 4 月 1 日現在で 138 世帯、人口 282 人となっており、昭和初期 1200 人の 4 分の 1 程度となっている。東は天竜川を挟んで秦阜村、西は浪合村(現阿智村浪合)・平谷村・売木村、南は天龍村、愛知県豊根村、北は下條村に接し、役場は、海拔 507m であるが、標高は、315m から 1,664m に及ぶ山間地に集落を擁し、町の総

※ 18 ページ地図参照

面積の84%が森林、農用地は7%、宅地は1%である。阿南町は、深山幽谷の地であるため、山の幸、川の幸が豊かな地域だと思う。事実、当院のある御供地区「南宮ホテル」(平成23年11月惜しまれて長い歴史を閉じた)では鯉料理が有名であり、傍を流れる天竜川から捕った魚だと側聞している。

筆者は、前職の県職員時代より特に下伊那郡の歴史、風土には興味を持ってきました。大鹿村や天龍村へは何度も足を運び、かつては阿南町和合地区にも度々仕事や私用で脚を運んでおりましたが、改めて本地区の理解のために、近代史から勉強をしてみました。大いに参考となったのは、おそらく南北朝より代々神官と名主を務めている宮下家ご当主による著書「書き残された和合史」(宮下金善・澄子共著)です。この地区を代々切り開き治めていたのが、当の「宮下家」であり700年の歴史を持つと言われています。



宮下家の現在



「念仏踊り」が行われる林松寺

読み解くと、遠く菅原道真を祖とする宮下家は伊勢や浜松などから入植したとされ、近隣の天龍村坂部集落の熊谷源氏家、新野の関平家とも関係ある家柄です。(その部分は省きます。)そこで和合地区の人たちは、どのような暮らしをしてきたのか。誰もが矜持を以って、個々に或いは集団の力となって厳しい自然と闘い、当時の日本の中心や世界に繋がって生き抜いてきたものと思います。例えば和合の掛け踊りは、宮下家のご先祖が江戸時代に川中島よりもたらしたと言われております。

(事実かは諸説あります。)当時の人達の描いていた「世界」「世界感」「一体感」とかは、現代に活かされているのだろうか。

(注)「書き残された和合史(宮下家古文書を読み解く)」(宮下金善・澄子著)は、2012年3月20日南信州新聞社より発行されています。

まず和合地区の歴史を探ってみます。江戸時代、「火事と喧嘩は江戸の華」と言われ「大都市江戸」は、築城、改修の場合や御城下長屋に数多く発生した火災の修理に欠かせないのが屋根板など多くの「木材」でありました。また食器では、お箸、御膳、お椀が欠かせなかったと思います（その後瀬戸物という茶器がありますが）。阿南町のみならず<sup>なんざん</sup>南山地域（㊦阿智川以南という意味）に「<sup>くれきおど</sup>樽木踊り」が多くみられるのは、屋根板などに使用され、租税（貨幣）の代納物であった「<sup>くれき</sup>樽木」から来ておりますが、現代では踊りのみが伝統文化として生きております。また、お椀などの生活用品を制作したのは、山を渡り歩く「<sup>きこし</sup>木地師」という専門集団でありました。例えば「<sup>おおくら</sup>大蔵」「<sup>おくら</sup>小椋」姓には、御先祖様が木地師だった方が多いようです。菊のご紋付きのお墓も残っています。明治時代になると、木地師達は、材料である木を求めての自由な移動が困難になってしまいました。木地師最後の集落と言われているのが木曾郡の<sup>きそぼた</sup>木曾畑といわれますが、定住した木地師はここ和合地区にもみられます。

明治から昭和にかけての時代には、社会科の教科書で習った富国強兵政策がとられ、軍備、産業を整え列国と肩を並べるべく争い続けて昭和20年の終戦（或いは敗戦）を迎えたのが日本です。関連ですが、飯田下伊那からは終戦直前の段階で多くの満蒙開拓団と義勇軍が現中国に動員され移住したため悲惨な結末となりました。ちなみに戦後医療の必要性は、今年4月よりNHKが朝の連続ドラマ「梅ちゃん先生」（主演・堀北真希）で放映しています。話を戻しまして、軍備財源である明治以来の殖産産業の花形は、映画「あゝ野麦峠」（山本茂美監督）で有名なあの製糸生糸の生産でした。製糸製品の輸出先は、民主大国である米国婦人が履くストッキングで、兎にも角にも農家の貴重な現金収入になったようです。それも買い取り人が農家まで来て現金買い上げをしたので、稲米よりも頻繁な現金収入となりました。今では中国での生産や化学繊維が全盛で比較にならないほど少ない国内生産農家数になっていますが、長野県でも蚕業振興を盛んに行っていました。当時まさかその主要な輸出先であるアメリカと敵対し交戦することとなろうとは、思いもかけないことになりました。しかし歴史上の事実なのです。

こうして、江戸時代から明治時代になるにつれ徐々に貨幣中心の世になり、戦後に及んで6・3・3制教育が導入され、更には大学ができると益々都市への人材流出が始まります。深山幽谷のある山里では、それまでは、必要な木材と薪炭（薪木や木炭）に恵まれ、木地師に金銭を積んで買い森林資源を売り、森は再生されると

いう循環の歴史を作ってきました。「限界集落」の多くは、ダムや道路の移転によって多くが派生してきたと言われます。最近では、子や孫が地域に戻ってこないという「限界集落」が発生してきております。多くの伝統行事は、厳しい山の生活の中にあってどうにか今日まで引き継がれています。一例を列挙すると、「新野の盆踊り」に始まり、「新野の雪祭り」、「早稲田人形」、「和合の念仏踊り」など阿南町だけで10を数えます。また天龍村「坂部の冬祭り」、現在は飯田市である上村、南信濃地区の「霜月祭り」など代表的なものだけでも限りがありません。これら伝統行事の多くは、厳しい山間部にあって生きていくうえで大切な年間の決まりごとであります。当地域の大切な一次産業である農業は、<sup>やきばた</sup>焼畑に始まり梅、お茶、柚子、茄子、桑など多品種少量生産という形になってきたと言われますが、豊富な照葉樹林である森は、木材や樽木となって天竜川（<sup>あらたまがわ</sup> 亀玉河又は<sup>あらたまかわ</sup> 荒玉河と言った）を利用する海運によって<sup>とんしやうじ</sup>遠州灘（現在の浜松市・家康がいた浜松城）へと、やがて江戸へと供給されましたので、和合や鈴ヶ沢の人々と大都会である江戸は深く繋がっていたのです。

さて巡回診療、訪問診療に同行しているうちに理解できたことは、昔ながらの集落の形を残して、今も生業、祭りを行いながら人々が暮らし続けていることです。

巡回診療所である集会所や公民館へは、阿南病院より車で40分以上を要します。この春3月6日には、信州大学及び附属病院の先生方を勝山努理事長とご一緒にご案内しましたが、予想しなかった事態が発生してしまいました。それは、通常ですと阿南町早稲田から国道151号線を分岐して和知野川上流沿いにある中部電力の和知野ダム（豊発電所）脇から入って行くのですが、早朝ですが、その僅か直前の見名トンネル手前で大量の土砂崩落事故が発生して、突然の通行止めになってしまいました。

ここは、勝山努理事長のレポートから一部を次に引用しご紹介します。

「和合の出張診療所へは田中院長にご同行いただきました。遠州街道が土砂崩れで通行止めとなったために、阿南病院から和合地区への迂回路を経ました。道幅3～4メートルほどのこの迂回路は左は急峻な山肌、右は和知野川が流れる深い谷であり、なかなかスリリングな30分間でした。

遠州街道から離れ、人家もなく、車ともほとんど出会わない道を20～30分ほど走り、最後に古色蒼然とした木造の和合出張診療所の建物にたどり着きました。昔の村役場だったそうですが、畳の部屋に木の机を置いてある診察室、昭和天皇ご夫

妻の写真が掲げられた大部屋など、今時お目にかかれない風景でした。2週間に一遍の診療日に10人余りのご老人が受診するとのこと。医学部学生、看護学学生にぜひ見せたいと言うのが皆さんの一致した意見でした。温田、田中両院長をはじめ、阿南病院スタッフの苦労を改めて実感いたしました。桜井部長の写真を参照してください。」

今冬は3月まで降雪が多く春が遅いうえ、長雨が続き道路上部の土砂が岩石もろとも崩落したのが原因であった。(当該個所には、飯田建設事務所による「落石注意」の標識がある。) 当院への通勤者は、和知野地区集落へと大きく迂回して通行しなくてはならないが患者様はもっと大変である。また救急車による搬送にも支障をきたします。さらに当院では、巡回診療の他に訪問診療、看護、リハビリの職員も相当な苦労を強いられることになりました。

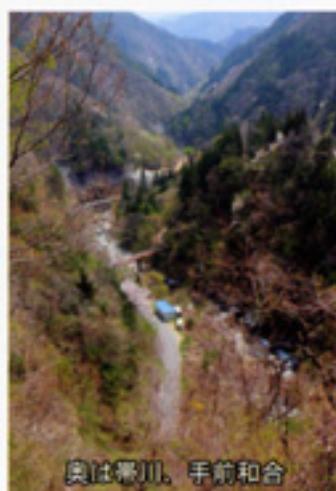
さて巡回診療所への案内当日は、前述とおりの和知野城<sup>わちのじょう</sup>があった集落を通り二瀬キャンプ場を通るルートで1時間以上を要したため、到着したときには既に太陽が沈んでいく頃となっていました。(②国道151号線の崩落事故復旧対策は、上部の整備を終えた4月28日から片側みの時間通行規制に緩和されたが、その矢先に迂回路である県道帯川為栗線に大型ダンプが早朝突入してそこも全面交通止め(3日間で解除)になりましたから、専ら峠道である林道の田上木曾畑線などを使うことになる。いまだ国道151号線は全面通行に至っていない。)



見名トンネル付近工事規制<sup>※</sup>



和知野ダム近くの変った交差点  
(右は日吉方面、手前は和合、奥は国道151号線へ)



奥は帯川、手前和合

ところで和合地区の崩落事象はというと、毎年春に定期的に発生します。このために巡回診療チームでは、鈴ヶ沢地区へは売木村からの峠道を迂回するルートなど、日吉地区へは、阿南町田上から木曾畑に出て、和合経由で押ノ田峠越えをしての道など常に予備の道を確保しています。

また雪深い高地なので道路の除雪は、売木村や新野境にまで延々と舗装道路です

※ 18 ページ地図参照

が住民の手により行われている（軽トラックの先にバンパーのような除雪装置を付けて）。感心なことに巡回診療所の庭先まで綺麗になっている。この冬の1月24日に鈴ヶ沢巡回診療所<sup>※</sup>へ同行したときのことである。二人のご婦人は、早くも部屋に居てストーブを焚き室内を温かくして待っていてくれた。診察の中身は、患者情報であるし門外漢ということになります。会話内容の一端をご紹介しますが「今年は雪が多くて大変だ、幾度も大変だに。きょうも雪掻きをしてきたところだ」との事でした。何も慌てることはないんだなあ。「お医者様が来て下されば安心だ。」医師の言葉も「最近体調はどうだな？」と優しいし、「普段は何しているの？」と問えば、「秋から冬には干し柿を作った。食べてくれる？「蜂谷柿<sup>はちやがき</sup>」というのだに。大きいらな？黒いばかりで色も良くないし美味しくないけど食べてみて。そっちのミカンは買ったのだに。」と全く屈託がない。世界が違いすぎるのだと思う。



信州大学医学部長、附属病院長、勝山努理事長による日吉巡回診療所視察  
(平成24年3月6日)



日吉巡回診療所より、  
右：新野方面、手前：日吉集落



押ノ田地区にある峠の道標  
(和合、日吉、田代黒田の分岐点)

限界集落になぜ住むのかという疑問は地域の人にとって愚問である。一般的に舗装道路は車両が通行するものであって、人足ではできない改良工事を機械で行って

※ 18 ページ地図参照

しまうために道筋が変わる。一昔前までは、いわゆる「峠」を通過して人馬が行き交うのが習いでありました。病院の診療圏だけでも、泰阜から南信濃へ、阿南町は田上から木曾畑を通過して和合へ、さらに和合から浪合へは川沿いに、そして峠越えで新野へと縦横な人物往来、交易がありました。日に10里(約50km)を平気で歩いた健脚ぶりで。「新野の雪祭り」を世に知らしめた民俗学者である折口信夫先生も、岐阜県より新野を目指して入県した経路は、岐阜県恵那～平谷村～和合・鈴ヶ沢～新野と峠道を歩いてみえたのだとか。和合の発展の陰には地元出身者に加えて他村より御嫁入りをされたご婦人の方々が地域の力になってきたはず。また昔から森林組合事業が盛んで「どんこ」と言う良質な椎茸を栽培しています。猪、天女魚の飼育と加工販売も奥地清流があるからこそできる生業です。さらに当院では、春には、山菜の王様＝タラの芽やウド、秋には、松茸が永らく饗されてきましたが、その豊富さと質の良さは際立っています。総じて「かつて和合では、塩以外とれない物はない」と言われたことも、さらに売木村と合併した当時(昭和22年4月1日～昭和23年7月1日)は、村名が「豊村」だったことから決して疑ってはいけないことだと思います。この“豊村役場”跡こそが、実際に日吉巡回診療所の前身なのです。現在和合地区の多くの住民は、森林組合に勤めていたり、飯田市内及びその周辺にある企業にも通勤しています。前述の宮下家当主も県立高等学校の教師であります。高地のため雪深いのですが、春の芽吹きに山桜、夏の清流、秋の紅葉は見事です。歴史探訪を兼ねて一度足を踏み入れるとリピートしたくなる魅力があります。



阿南町早稲田神社



売木川に沿って、和合へ向かう道



国指定選択無形文化財・早稲田人形

③ 病院より和合日吉及び鈴ヶ沢地区巡回診療所に至る経路「文中の関連地図」



- 国道
- 市区町村境
- X 本誌中の通行止め箇所
- 一般県道
- 河川
- ← 峠



中部電力・和知野ダム



和知野ダムより国道151号線方面

## あとがき

事務部長 櫻井 勝司

阿南病院は、開院以来今年で60年余を経過し老朽化したため、昨年3月より耐震化改築工事を実施しております。本院の「病院概要」或いは「50周年誌」によると、巡回診療を開始したのは昭和36年であります。元・前職である病院長及び副院長を経験されたなかで、熊谷睦先生、鈴木伸典先生、温田信夫先生各氏は、へき地医療貢献で叙勲や自治体病院協議会等から表彰をされました。当初に阿南病院を開設したのは、地元阿南ブロック9か村の地域であり、2年を待たずに県立に移管されております。戦時疎開で疎開、復学した千葉医科大学の先生（河合教授等）が中心となって総合病院を提唱し設立された訳ですが、どうやら医師の方々は、農村医学研究所の研究者という位置づけで着任したようです。銅像がありますが、初代荒木武雄院長から数えて第5代目田中雅人が現在の院長職を担っています。本院は内科医中心の病院となって老健を併設し地域医療を守っております。振り返りますと、当初は、全国的な傾向と同じで、結核や精神医療を中心にしており、昭和28年には准看護学校を創設し、文化活動の一環から医療寸劇を、さらに先駆的な取り組みとして、保健所の前進となる保健活動、リハビリ活動、がんの早期発見治療を精力的に行い、助産もしながら、医療界を牽引してきました。当時の医師不足は今日の比ではないと思いますが、5名もの外科医を擁していました。さらに国保診療所もない時代に、医療の光を地域に届けとばかりに、遠く木曾谷（王滝村も）から上伊那郡箕輪町まで巡回診療を行いました。本院には、地域に入って地域の方のための医療をする、そんな遺伝子が今も脈々と受け継いで伝えていて、デリバリー診療（訪問診療など）に繋いできていると思います。大震災が発生すると「総合医の意義」が必ず問われ直されます。全国自治体病院の使命にあるように、患者の居る限り医療の光をとの精神である「巡回診療」は、「医療の原点」であります。

最後までお読みいただき感謝します。



訪問診療・田中雅人院長



平成23年4月東日本大震災災害支援チーム

---

### 巡回診療物語 (非売品)

発行年月日 平成24年8月11日  
発行人 地方独立行政法人 長野県立病院機構  
県立阿南病院 (〒399-1501下伊那郡阿南町北条2009-1)  
編集責任者 櫻井勝司  
写真撮影 櫻井勝司 (三浦小太郎、平栗寿美、市瀬光彦各氏より一部借用)  
印刷 龍共印刷株式会社  
〒395-0004 長野県飯田市上郷黒田121  
TEL (0265) 22-5353

---



阿南町川田地区・道祖神



旧南信濃村和田神社の霜月祭り(国指定重要無形文化財)



阿南町平久(ひらく)「塔の観音展望台」より撮影